

令和3年度 第6回 岐阜市総合教育会議 会議録

- 1 日 時 令和4年1月6日（木）13時30分～16時00分
- 2 場 所 岐阜市役所庁舎 6-1 大会議室
- 3 出席者 柴橋市長、水川教育長、川島委員、足立委員、武藤委員、横山委員、伊藤委員
- 4 招聘者 岐阜大学教育学部附属小中学校 校長 古賀 英一 氏
- 5 傍聴者 一般2名、報道関係者3名
- 6 次 第 (1) 市長あいさつ
(2) 協議
第1部「大綱実現に向けた施策推進状況」
第2部「年間総括～今年度協議の振り返り～」
(3) 閉会あいさつ
- 7 議 事

(13時30分開会)

○佐藤事務局長

只今から、令和3年度第6回岐阜市総合教育会議を開会いたします。本日、司会を務めさせていただきます、教育委員会事務局長の佐藤でございます。よろしくお願いいたします。

本日は、柴橋市長、水川教育長、川島委員、足立委員、武藤委員、横山委員、伊藤委員にご出席をいただいております。また、招聘者といたしまして、岐阜大学教育学部附属小中学校校長、古賀 英一様にご多用の中、参加を賜っております。古賀様、本日はよろしくお願いいたします。

傍聴者の皆様に申し上げます。傍聴に際しましては、受付で配付いたしました傍聴人の遵守事項に記載した事項の遵守をよろしくお願いいたします。

次に、本日の会議資料の確認をさせていただきます。皆様のお手元のタブレット内には、次第及び席次表、資料1、2、3及び参考資料を収納し、準備しております。不足等ございましたら、挙手を願います。

それでは、次第に沿いまして会議を進めてまいります。初めに、柴橋市長よりご挨拶を

いただきます。

○柴橋市長

皆様、新年明けましておめでとうございます。本年も教育委員の皆様方には、ご指導のほどよろしく願いいたします。

それでは、今年度第6回目の教育総合教育会議でございますが、年始の対応でお忙しいところをご出席賜りありがとうございます。

今回は、第6回目となりますが、委員の皆様と率直な意見交換をしながら、共に岐阜市の子ども達の教育について方向性を議論し、決めていっておりますことを本当に嬉しく思っております。

また、本日は最終回ということで、これまでの全6回の意見を振り返ることに加え、岐阜大学教育学部附属小中学校の古賀校長先生にもご出席を賜り、ありがとうございます。

私どもは、2019年のいじめ重大事態の後、教育大綱を改定いたしましたが、その中で、特に「生命の尊厳への理解」をしっかりと教育の方針に捉えながら、「生き方の探究学習」に取り組んでいるところでございます。

岐阜大学教育学部附属小中学校では、一歩先に「どう生きる科」という教科をつくり実践をしておられるということで、本日は、色々と率直にお話をお聞かせいただければと大変楽しみにしております。

これまで、色々と教育について議論してまいりましたが、本当に大きな原動力となっているのは、このいじめ重大事態と、もう一つは不登校の問題です。このような子ども達がいかに安心して学校で学び、友達と共に成長していけるような教育を、一緒につくっていくことが、この会議に参加しているメンバーの大きな使命であると思っております。

本日も、是非、前半の総括も踏まえながら、ご意見を賜ればありがたいと思います。どうぞよろしく申し上げます。

○佐藤事務局長

ありがとうございました。それでは、次第の2、協議の第1部に移ります。テーマは、「大綱実現に向けた施策推進状況」でございます。

第1部の進行といたしましては、事務局から説明をさせていただき、続けて、古賀様から講演を賜り、その後、意見交換とさせていただきます。

では、事務局よりご説明申し上げます。皆様、タブレット内の資料1をご覧ください。

○児山教育政策課主幹

事務局よりご説明させていただきます。資料1の2ページをご覧ください。事務局からの説明といたしまして、1番から3番の順にご説明させていただきます。

第6回の会議の第1部の持ち方につきまして、3ページから記載しておりますが、皆様には5ページをご覧いただきたいと思います。

本日の協議におきましては、事務局や招聘者の方の説明後の意見交換の場では、一番下のピンク色の四角部分でございますが、本市における「生き方の探究学習」の取組みをさらに充実・発展させていくために、今後必要と考える視点や具体的な施策について、ご協議いただきたいと思っております。

それでは、この後、教育委員会及び学校、それぞれの取組みにつきまして、ご説明申し上げます。

○星野学校教育審議監兼学校指導課長

学校指導課よりご説明させていただきます。7ページをご覧ください。

本市は、2019年のいじめ重大事態を踏まえ、昨年度、岐阜市教育大綱を改定しました。その基本方針には、「生命の尊厳への理解」がうたわれています。生命軽視の軽はずみな言動、他者理解の弱さなどを克服し、誰もが価値ある大切な存在として互いに認め合う教育を推進することが示されております。

これを受け、今年度より総合的な学習の時間を軸に、道徳及び特別活動、各教科において横断的な視点から「生命の尊厳への理解」を深める「生き方の探究学習」の時間を位置づけています。

8ページをご覧ください。画面の図は、「生き方の探究学習」の枠組みです。各教科等の指導の中で、生命の尊厳につながる学びを意図的・計画的に展開できるように留意しました。このように取組む中で、「生命の尊厳への理解」を深めるための大前提として、生命そのものの捉え方や、生命観を明確にする必要があると考えました。

9ページをご覧ください。そこで、今年度、医師や大学の心理学、道徳教育などに関わる有識者を招聘して、ワーキンググループを開催し、画面の内容などについてご助言をいただきました。

10ページをご覧ください。画面の図は、ワーキンググループを経て完成しました「生き方の探究学習」の構想です。

生命観を構成する要素について、図の下にありますように、感覚性、関係性、連続性の3つに分類、整理しました。感覚性とは、生きていることの素晴らしさ、限りある生命の大切さを感じることです。関係性とは、互いの生命を尊重し、共によりよく生きようと関わることです。連続性とは、生命が過去から今、そして、未来へつながることを意味しています。

この生命観を構成する3つの要素について、小学校1年生から中学校3年生の発達の段階を踏まえ、各教科等の学習内容から抽出して指導することで、「生命の尊厳への理解」を深めることができるように考えました。

その中で、多様な他者の生き方に触れながら自己の生き方を問い続け、一人一人持続可能な社会の担い手として、夢と希望に満ちた幸せな未来をつくり出せる力を育むことを目指しています。

11ページをご覧ください。このことを踏まえ、小中学校の各教科等の学習内容から、生命観を構成する3つの要素を抽出し、まとめました。画面の一覧表は小学校の例です。どの学習でどの要素を中心にして学ぶのかを示してあります。

12ページをご覧ください。画面の一覧表は、中学校の例です。これらの一覧表を基に、各学校で「生き方の探究学習」の指導に役立てていただくよう周知しているところです。

13ページをご覧ください。今年度は、中学校において新しい教科書に沿って、市内の先生方が活用する教科の指導計画を改定しています。その中に、先程の一覧表を基に生命の尊厳の項目、要素を位置づけています。

14ページをご覧ください。今後の方向として、「生き方の探究学習」の一層の充実を図るために、画面の2点を考えています。

1点目は、生命に関わる多様な学びを展開することです。総合的な学習の時間を軸として、生命に関わる探究的な課題や、発達の段階に応じた体験活動や話し合い活動を仕組むことで、自他の生命のかけがえなさを実感することができるようにします。

2点目は、生命を輝かせて生きる人の生き方から学ぶことです。地域の自然・歴史・伝統・文化・産業などに関わって、ふるさと岐阜で生きる人の願いや努力、苦労などに触れることで、自己の生き方を考え、将来の夢や希望につなぐことができるようにします。

今後、「生き方の探究学習」を通して、「生命の尊厳への理解」を深め、一人一人が価

値ある大切な存在として、互いに認め合う教育を推進していきたいと考えております。

○柳津小学校 河村校長

それでは、「生き方の探究・生命の尊厳」の実践の報告をさせていただきます。お手元の資料の15ページをご覧ください。

今年度、先程、学校指導課長より紹介がありましたワーキンググループの一員として、研究に携わりながら実践を進めたものです。

15ページにありますように、本年度、広報ぎふ11月1日号で、本校の「生き方の探究学習」を紹介していただきました。大変光栄なことだと考えております。

16ページをご覧ください。「生き方の探究・生命の尊厳」の学習、それは、子ども達の笑顔、充実した人生、そして、輝きに満ちた未来を創り出すものであると考えております。

17ページをご覧ください。そのために学校として取り組まなければいけないことは、全学年の子ども達が「生き方の探究・生命の尊厳」を学ぶということです。

そして、18ページをご覧ください。全ての教科・領域等において、同じように「生き方の探究・生命の尊厳」を学ぶということは、子ども達がしっかりとした学びを身につける上で大事であると考えております。

それでは、19ページから具体的な実践について紹介させていただきます。ごく一部ですので、お許してください。

これは、低学年の生活科における様子です。育てたアサガオの成長を前にしながら、実際に、タブレットを使って春先に撮った写真と見比べながら、手で葉っぱを触り、確かめている様子です。命に触れるということは、まさに本物の植物に触れ、そして、実感して学ぶことであると思っています。こうした経験の積み重ねこそが大事であると考えています。。

20ページをご覧ください。小学校中学年における特別活動です。先程の、広報ぎふに紹介させていただきました助産師の方から学ぶ体験活動です。胎児の人形を大事に抱きながら、命の大切さを改めて学びました。胎児の人形を、本当に大切そうに抱えている子ども達を見ると、こうした学びの大事さを感じました。

21ページをご覧ください。これは、中学年における社会科と総合的な学習等を合わせたもので、地域の建設会社の方と防災学習の後に、自分たちの庭をつくるとするなら、命

を守るための庭を設計しようと取り組みました。企業の方と一緒にあった取組みで、自分たちが普段遊んでいる家の庭が、実は命を守る庭であったということを改めて実感することは、子ども達にとって、大きな学びとなりました。

22ページをご覧ください。これは、小学校高学年の道徳の授業の様子です。差別に向かって毅然と立ち向かうガンジーの生き方を学ぶ授業でした。その中で子ども達は、真剣に偉人から命を貴ぶことの大切さを学んでいきました。

23ページをご覧ください。これは、全校の児童が行う児童会活動の取組みです。東日本大震災での希望のヒマワリの種を4月に水川教育長から頂きました。その種を校庭で育て、自分たちで栽培し、種を地域に広めていく取組を児童会として取組んできました。

1粒の小さな種が成長し、それが種をつけ、それを地域に広めることによって命をつなぐこと、社会をつくっていくことの喜びを学ぶ貴重な体験となりました。

こうした体験を積み重ねることは、子ども達の中に生命の尊厳、命の大切さを学ぶ重要な取組みになったと考えております。

24ページをご覧ください。こちらは柳津小学校における「生き方の探究・生命の尊厳」の学習について、年間を通して、全学年が学習する内容の構想図です。この構想図を作成しながら、子ども達が繰り返し、そして、全ての学年、全ての教科において、学んでいくことができるように取り組みました。

25ページには、岐阜市のストップ温暖化出前教室で、講師の方から、将来社会につながる生き方を学んでいる様子です。こうした学びをとおして得た子ども達の感想を、最後に紹介させていただきます。

26ページをご覧ください。6年生のある児童の作文です。

「自分の『命』って、世界に一つしかない大切なもの。1人1人が価値ある大切な存在。なのに、いじめが起きるのはどうして。それは、『命』の尊さ、素晴らしさについて、あまり知らないから。自分さえ良ければいいという考えになっていないかと思う。だから、1人1人の大切さを知ってもらい、今の自分と向き合って、1人1人が自分と同じぐらいかけがえのない大切な『命』であることを知ってもらうことが必要。

『生き方』を見つめたり、考えたりすることによって、もう一度、自分のしたことを見直し、『本当にいいのか、わるいのか』と考えることができる。学んだことを生活に生かし、今の自分と向き合い、一步一步歩めるようになる。このことから『命』や『生き方』の大切さを学ぶことは大切なことだし、これから自分たちが成長していくのに大切に一つ

の経験だと考える」という感想でした。

27ページをご覧ください。このような「生き方の探究・生命の尊厳」の学習は、今後、構想を基により具体的な、より効果的な実践へと高めていきたいと考えております。しかし、その前に我々教師自らが命を、そして、生き方を熱く語ることが大切であるということに改めて感じています。

○児山教育政策課主幹

事務局からの説明は以上でございます。

○佐藤事務局長

それでは、続きまして、古賀様より講演を賜りたいと思います。皆様、タブレット内の資料2をご覧ください。古賀様、お願いします。

○岐阜大学教育学部附属小中学校 古賀校長

岐阜大学教育学部附属小中学校校長の古賀でございます。今日は、こうした会議にお招きいただきまして、非常に光栄に思います。どうぞよろしく申し上げます。

タブレットでは、この画面が少し見づらいと思いますが、本校は、令和2年度から、義務教育学校化をいたしまして、9年間一貫した教育を全うする学校となりました。

我々は、義務教育学校化の暁には、教育内容も何か特色のあることを行おうと、文部科学省に申請し、教育課程について、現行の学習指導要領には縛られない教育指導を実施できることとなりました。

そして、去年はコロナ禍で試行の1年間でしたが、今年から正式に4年間かけて、「どう生きる科」をつくっていくことになりました。

本校としては、将来的な国の学習指導要領の参考に、是非取り上げてもらえるような実践になればと、夢を持って取り組んでいるというところです。まだ始めて間もないため、先程お伺いしました、岐阜市の構想や、柳津小学校の構想から様々なこと学ばないといけないと思っております。また、ご指導いただければ幸いに思います。

では、2ページに記載の3点を中心にお話をしてまいります。

まず、全ての教育のベースとなるのは、カリキュラムマネジメントという考え方です。それぞれの教員は、カリキュラムデザイン、つまりどのように教育課程をデザインしてい

くのかに、知恵を絞って考えていくことが使命であり、学校の校長は、これをマネジメントしていこうという考え方です。

このように考えますと、本校は先程申し上げたとおり、1から9年生までの縦の縦断的な視点で教育を捉えていくという、非常に大事な使命を持っています。

しかし、教科については、1から9年生の学びをどう積み得ていくのか指導計画をつくり上げていく際に、特に6年生と7年生の間に、見えない学習指導要領の壁があります。

つまり、学習指導要領や、教科書を見ていくと、まだまだ小学校と中学校の内容に、段差があると私は思っています。

そのため、子どもの中でそれを積み上げていけない部分、段差が高過ぎて、中学校になるとついていけない部分が出てくるのです。そこにメスを入れて紡いでいくという発想が、是非とも必要です。

例えば、7年生、いわゆる中学校1年生の社会の教科書を、現在、本校では6年生が使っています。6年生で出てくる歴史と、中学校1年生で出てくる歴史を統合し、一つにして深く学んでいく方が子どもにとっては効果的であるという考え方のもと、このような学びのデザインしていく取組みを行っています。

一方で、今言われている横断的な視点も、大事な部分です。

ところが、子ども達の実態に目を向けますと、例えば、全国学力学習状況調査の「授業で学んだことを、他の学習に生かしていますか」という質問に対し、左が9年生、右が6年生で、下の段が全国平均、上の段が本校です。本校では当てはまる子が、5割に満たないことが私は課題であると感じています。

そのため、色々な教科が合科、クロスとありますが、カリキュラムをつくって、一つのテーマを色々な教科で考えていくことに取組んでいます。

子ども達にとって教科は、ある意味大人の都合での枠組みであり、教科ということを、あまり意識はしていません。

したがって、生活の中で、例えば、買物に行った際に、色々な教科の学びを引き出し、判断をしていくことを考えると、色々な教科をクロスさせる取組みが、絶対に必要であると思います。

もう一つ、大きな課題は、学ぶことと生きることが乖離していることです。例えば、先程の全国学力学習状況調査において、出口の9年生で、「授業で学習したことを、普段の生活の中で活用できないか考えますか」という質問に対し、これも当てはまる子どもが、

5割を満たないという課題があります。授業で学習したことを、普段の生活の中で活用できないかと考えようとしている子が、たったの3割しかいないという実態に課題意識があります。

また、私が一番注目し、大きな課題だと考えていることは、水川教育長も同感でしたが、「自分には、よいところがあると思いますか」「将来の夢や目標を持っていますか」という質問に対し、当てはまる子が、5割に満たないというところです。

このことについては、先程の生命の尊厳や自分の存在価値などを高めていけば、生きるエネルギーやそのベクトルというのは、強くしていけるという構想を持っています。

さて、この学ぶことと生きることを融合して、ここで生まれてくる発想が、「どう生きる科」という新しい学びの領域になります。当然、横断的な視点から、教科と「どう生きる科」を、常に往還させながらマネジメントしていくことで、教科で学んだことをどう生かすのか、どう生きる科で学んだことをどのように教科に生かすのかという考えをもって、常に教員たちは授業づくりをしています。

それでは、「どう生きる科」が目指すものについてです。子ども達は予見困難な未来、解が一つではない問題との遭遇に幾度も差しかかってきます。その際に、子ども達が周りの人々と協調しながら、自分なりの解を見だし、自分が進むべき道を切り開いていく力をつけていくことが、「どう生きる科」の目指す未来です。これは、AIでは解決が非常に困難であり、人間の強みを生かすべき部分だと思っています。

次に、右側に4つの資質・能力が出ていますが、「知識・技能」「主体的な問題解決力」「協働的な関係構築力」「貢献する人間性」についてです。

これは、先程の岐阜市の構想でいう、3つの目指す姿につながるものだと思いますが、この4つの力は、課題に対する最適解や納得解を見出すための力になっていくと考えており、是非、子どもたちに身につけてほしいと思っています。

特に、本校は、学年が上がるにつれて最後の9年生の出口では、一番右側の「貢献する人間性」に着眼できる子ども達を育てていこうという構想があります。

この4つの力には、細目を位置づけています。子ども達は、ある課題に対してゴールを目指していきますが、このように、いつも直線的にうまく解決していけるわけではありません。必ずどこかで、ジレンマやエラーが出てきます。おそらく、ここまでは方法的に解決できるのですが、これから先は、方法的には解決できない部分です。

ここで大事なのが、生き方につながる道徳性や価値観というところに向き合い、切り抜

けていく、そのような学びをつくっていくことが大事であると考えています。

そのため、1つの単元をつくる際に、子どもが外してはいけないことは、ゴールがどのように問われていくか、ジレンマやエラーがどのようなところで訪れるのかということです。

そこで、どう仕掛けをつくり、子どもたちに乗り越えていかせるのかについて、この骨子があれば、大体をデザイン化していけると考えています。

現行の総合的な学習の時間、1、2年生は生活科と道徳の時間を一体化して、この枠組みを取り払ったものが本校の「どう生きる科」です。

今までの道徳でも一生懸命やってきたのですが、子どもにとって、学ぶ切実感を中々引き出しきれていないという課題がありました。なぜかという、教科書資料は、どうしても、子ども達にとっては遠い存在になってしまっている部分がありますので、ここを何とかしないといけないと思いました。

そのため、「どう生きる科」の中で出会う人たち、色々な問題、現実と向き合いながら、リアルな道徳として考えていくことが、本校の道徳です。ただし、教科書にも非常にいい資料がありますので、関連した資料を使いながら、学ぶ切実感を出していくことが本校の構想です。

これとは別に、定期的にDSTと呼んでいます。どう生きる科スキルトレーニングがあり、人間関係を構築するためのスキルトレーニングということで、心理の教員が中心となり、色々工夫しながら、人間関係をつくっていくようなゲームなどを行う教育課程も組み込んでいます。

次に、どう生きる科のデザインの仕方についてです。

1つ目が、探究をどのようにつくっていくのかという段階的なもので、まずは、調べる、見る、聞くという段階があります。現在は、タブレットで幾らでも調べられるのですが、それだけでは十分ではないため、積極的に外に出て、色々と街の人にインタビューをし、実際に、自分の目で見ます。

特に、6年生は盛んに、岐阜市のまちづくりというテーマで取り組んでいます。まず調べる、見る、聞くという段階がありますので、この前は、JR岐阜駅で色々な人にインタビューしていました。

次に、その結果を持ち寄り、仲間と議論をし合うという段階があります。

そして、考えをまとめていきます。これは、一人一人自分の考えをまとめていくという

ことです。

それから、先程申し上げましたエラーやジレンマを、どのようにして乗り越えていくかです。うまくいかないが、どうするのかと考えていくサイクルがあります。

そして、大事なことは、プロジェクト化で、アイデアや提案を発信するところまで行かないといけないということです。考えたことをそこに留めるのではなく、まとめて相手に発信し、評価してもらうというサイクルが必要になってきます。

例えば、これは今年の例ですが、岐阜市のまちづくりの中で、省エネのまちづくりをテーマにしたグループがありまして、東京の富士通株式会社の本社の方とオンラインでつなぎ、自分たちで考えた省エネ対策を提案している場面です。

また、これは医療法人和光会の方が主催のSDGsミーティングで、住みよいまちづくりについて発表している場面です。

次の写真は、4年生の動物の命から人間の命を考えていこうという授業の黒板や掲示板を撮ってきたものです。

まずは最初に、自分たちの考えをみんなで共有します。

そして、色々な人たちを招聘して話を聞きながら、次はこのような疑問が湧いてきたので、この人からの話を聞きたい。そのためには、この人を呼んで話を聞こうと展開していきます。これだけで4名ほどの方に来ていただき、話を聞きます。

最後に、最初の自分たちの考えと、最後の出口の考えが次第に深まっていったと実感していく様子が掲示板に貼ってあります。

それから、珍しいのですが、4年生は動物の飼育を行っていますので、そこに視点を当てているのですが、ルールは子ども達が敷いていくということが基本です。教師が引っ張って、ルールを敷いてしまっては中々うまくいきません。そのため、これを大事に取り組んでいます。

次に、探究のテーマや教材づくりですが、9年間、どのようなテーマや教材にしていくのかについて、発達の段階を見ながら構成していきます。その際は、身近な人から、段々と地域社会、最後には、地球規模へと探究のフィールドが広がり、そして、具体から抽象、形から本質、一様から多様へ、探究の質的な深まりを1年生から9年生まで高めていけるように、テーマや内容を考えていきます。

まだ、この辺りは不十分なところがあり、ワーキンググループが来年に向けて考えていくところでもあります。

では、少しだけ紹介をしていききたいと思います。ここがどのように単元を作っていくかという単元の構想づくりのところで、先程柳津小学校の校長先生が示していただいた部分と同じです。

例えば、I部は1年生から4年生までですが、1年生は、中々、生命の尊厳について理解することは難しい部分があります。

そのため、2年生あたりから段々と目を向けていけるということで、わくわく野菜大作戦というテーマがあります。大作戦というのは、I部には非常にヒットするテーマですが、野菜をとにかく大事においしく育てて、お家に持って帰り、家族の人に喜んでもらう作戦を立てていくわけです。

しかし、途中で野菜に虫が寄りついてきます。面白かったのが、虫が来た際に、最初は、虫を殺さないといけないとなります。そして、殺すために家から殺虫剤を持ってくるといふ子どもらしい発想でいくわけです。しかし、よく考えてみると、虫にもちゃんと野菜と同じように生命があり、生きるために野菜を食べに来るといふことに段々と気づいていきます。そうすると、虫を殺そうではなく、虫を近づけないようにしようという発想になってきます。2年生の発想でいうと、掘りをつくって水を溜めて虫が来ないようにしようとか、殺虫剤ではなくて、酢を使って野菜にも害のないようにしようします。

また、8年生か9年生のお兄さんに聞いてみようという作戦を立ててみたり、通りかかった技術科の先生を呼んで教えてもらうのです。

次に、3年生では、お花大作戦というテーマがあり、全国の花に目を向けていきます。

それから、4年生になると、先程の動物や人間の命というところに目を向けていき、段々と生命が進化していくこととなります。

その次に、5年生では、食品ロスというテーマが出てきます。なぜここに、食品ロスが出てくるかという、実は、去年スタートの3か月間は臨時休校となりました。そのときに、牛乳がどれだけ廃棄されたかということに目を向け出しました。牛乳というのは、牛の命から頂いているものであり、今まで学んだ命というところから来ていますから、命を無駄にしているというところに、子ども達は行き着きます。そのため、牛乳から食品ロスを考えていこうという発想になってきます。

ところが、ここにどのようなジレンマが起こるかという、お乳が出なくなった牛は、今度は、出荷されてお肉になっていきます。つまり、殺されてしまうという現実を知って、子ども達は、人間は悪魔だ、裏切り者だと言うわけです。子どもらしい発想です。

このようなジレンマが起きてきますので、そこで仕掛けたのが、岐阜農林高校の生徒さんたちとの遠隔でのコラボです。

そこで、子ども達は、動物は愛玩動物であるが、牛はいわゆる人間の生活を支えていかなければいけない経済動物であるということに段々と気づいていくわけです。これを岐阜農林高校の生徒たちが、画面の向こうで、本当に愛着を持って育ててきた牛を手放すことは、私達も本当に辛いのだと涙を浮かべながら語ってくれるわけです。

一方で、これは経済には必要なのだということも教えてくれるのです。

その中で、子ども達は、私達にできることは、感謝をして食べることであるというゴールにたどり着いていきます。

それから、6年生の、住みよいまちづくりについてです。柴橋市長には、去年7月にお越しいただき、お話いただきました。お話の中で、子ども達が一番飛びついた瞬間は、ある女の子の「住みよいまちづくりとは、どんなまちづくりなのか」という質問に対し、柴橋市長が「暮らす市民の幸せを考えたまちづくりなのだ」とおっしゃられたところでした。

そのことをきっかけとして、6年生が、住む人が幸せなまちづくりとは、どのようなまちづくりなのだろうかと考えたことが、このテーマのきっかけです。

これは、今年の5、6年生の実践です。例えば、プロジェクトというところを見ますと、柳ヶ瀬活性化プロジェクト、長良川清掃プロジェクト、省エネまちづくりプロジェクト、伝統・文化プロジェクトというグループに分かれて探究をしていきます。

ここでも、ジレンマやエラーが必ず出てきます。つまり、最初は、子ども達なり思いだけでプロジェクトを進めていくのですが、当然あるところへ来ると、それだけでは解決しないことが出てきます。

去年は、長良川の清掃グループが、ごみを捨てないでという内容の看板を立てることや、ごみ箱を設置することについて、岐阜市役所の職員の方に提案をさせていただきました。その際に、職員の方が、それはあなたたちの考え方なのか、住む人たちの考え方なのかとおっしゃっていただきました。このことがきっかけで、自分たちだけの考え方になっていたのではないかと、インタビューに行くことになりました。私も長良の住民ですから、子どもからインタビューを受けました。

結論として、景観を損ねたくないとか、川にごみがあるとマイナスイメージになると伺い、子ども達は、自分たちだけの思いで来たところを、もう一回考え直していくことにな

り、再び、新しい学びに踏み込んでいくということがありました。

さらに、8年生になってきますと、中学生ですから、内容が高度になってきます。ある学級は、幸せに生きる×テクノロジーということで、AIと人間が共に生きるためにはというテーマで取り組んでいます。

こちらは、ソニー株式会社の社員の方で、アイボという犬のロボットを開発している方と遠隔で質疑応答した様子となります。子ども達が、アイボを飼っている人に愛着が湧くのか、アイボによって性格が変わるのかという質問をした際に、育て方によってアイボ一つ一つ違う性格になっていくと答えていただきました。子ども達はそのことを、非常に面白がっていました。そうすると、行き着くところ、AIが人間に勝ってしまうのではないかと不安になってくるため、人間ならではのできることは何なのかということを考えないといけないという、次のテーマに発展していきました。

それから、外部人材との連携についてです。昨年度と今年度、岐阜市役所のこれだけの方々にお世話になりました。この場を借りまして、感謝を申し上げたいと思います。ありがとうございました。直近でいうと、12月17日に環境部の方々に2時間来ていただきましたが、子ども達は本当に輝く目で学習していました。

その他、高校とも色々なコラボをやっておりまして、岐阜工業高校、岐阜農林高校、加納高校の方々にご協力いただいています。

最後に、9年生の出口でどうあるべきかについてです。

このごく普通の物静かな男の子が「『どう生きる科』を通して学んだことは、将来、自分はものづくりに関わる仕事をしたいと考えているが、自分のことだけを考え方だけではなく、他者意識を持って、使っていただく方のことを考えて、仕事で貢献できるようになりたい」と語っていたのが印象的でした。

以上をもちまして、「どう生きる科」の実践報告をさせていただきました。ありがとうございました。

○佐藤事務局長

古賀様、ありがとうございました。古賀様には、この後も引き続きご参加いただきます。よろしく願いいたします。

それでは、これより意見交換に入らせていただきます。

皆様には、本市における「生き方の探究学習」の取組みをさらに充実、発展させていくために、今後、必要と考える視点や具体的な施策についてご意見を頂戴したいと存じます。

それでは、委員の皆様から順に、ご意見を伺ってまいります。

なお、時間の都合上、失礼ですが、お一人の発言時間は5分以内を目途とさせていただきます。

では、伊藤委員からでよろしいでしょうか。お願いします。

○伊藤委員

教育委員の伊藤と申します。河村先生、古賀先生、本日は本当にありがとうございます。

昨年度、市長と共につくり込んだ新しい大綱が、どのように学校の現場で根づいているか、大変気になっておりました。中々先が読めないコロナ禍での1年でしたので、大綱に合わせた学校教育活動への舵取りが難しいであろうと思っておりました。

しかし、今回の柳津小学校の取組みを伺い、また、我が子たちの学校での話を聞いている限り、予想以上に、今までの教育活動に「生き方の探究学習」を加える方向性になってきていると安心しているところです。

ただし、まだスタートしたばかりですので、それが表面的に終わっているのではないかと危惧しております。特に、小学校の高学年や中学生など自己が発達している子ども達にとって、どうしても「生き方の探究学習」をやらされている感が出ていないか気になっておりました。

私は、生命の教育をする上で、もっと中長期的に他者に対する想像力を養わなければいけないと考えております。そのため、本日は、岐阜大学教育学部附属小中学校での新カリキュラムについてお話しいただき、中長期的な将来に向けた学びの実践について学ばせていただいたことを、ありがたく思っております。

岐阜大学教育学部附属小中学校での新カリキュラムは、学校でただ勉強するのではなく、より社会的、実践的であり、将来の課題解決型の学びとなっていることが大変先進的で、創造的であると感銘を受けました。

そのため、このような子ども達が自ら興味が湧くような学び方を、今の教育にプラスアルファしていただけたらと強く願っています。今後は、岐阜市の小中学校で、このような新カリキュラムについての学び方を注視していきます。

そこで、先月、私が小学校3年生の子の授業参観のため、学校にお邪魔した際、総合的な学習のまとめが廊下に貼ってあり、それを拝見しました。昨年までは、探究学習では、

お店や商品のことしか勉強していなかったのですが、今年は、プラスアルファして、そのお店の方の生き方について学んだことがまとめてありました。お店の方は赤裸々に紆余曲折の人生などを語っておられまして、そこで働く方の人生、その方の生き様のような光と影についても勉強できていたということは、総合的な学習がかなり進化している表れであると思いました。

そのため、これからは、もっと様々な価値観、人生観、他者に対する想像力を膨らませるような学びが、今後子ども達に必要となってくると思います。そして、それを促すような学び方を、岐阜市の小中学校で行っていくことが大切だと考えています。

また、教える学問と現実社会をつなぐような教科書の枠から飛び出した授業ができる先生は多くはないと思います。

しかし、そこは岐阜大学教育学部附属小中学校での取組みと同様に、色々な方のお力をお借りして、子ども達に教えることができる、学んでもらうことができるような仕組みを私たち教育委員会もつくっていかねばいけないと思います。

そのためには、今後、各学校が困らないように、岐阜市全体の人材バンクをつくりまして、そこから、地元の先生や行政の先生などを送ることができるような仕組みづくりに取り組んで、より「生き方の探究学習」を深めていきたいと思っております。

○佐藤事務局長

ありがとうございました。それでは、横山委員、いかがでしょうか。

○横山委員

横山です。お二人の説明者の方、どうもありがとうございました。

私は、「生き方の探究学習」については非常に期待しており、本日、実際に、お話をお聞きして、岐阜大学教育学部附属小中学校の取組みが、良く出来ていると思いました。

つまり、一般的なことを申し上げますと、「生き方の探究学習」は、どうしても淡泊的な散在した学びになりやすく、いかに系統立てた一貫したカリキュラムにするかが難しいと思うのです。そういう点を、岐阜大学教育学部附属小中学校の場合はしっかりとできているという感じがしました。それぞれの発達段階に応じて、きめ細かく取組んでいると思います。

それから、これは両校というか、全体に対してお願いしたいのですが、教育委員会の中

で何度か申し上げておりますが、生き方について子どもに教える前に、まず規範意識をもっと強調してもいいのではないかと思います。やはり、最低限こういうことはしっかり守らないといけないということを、小さい頃からしっかりと教えます。そこは徹底すべきだと思います。

これから、「生き方の探究学習」を進めるに当たり、教科の抽出、合科が出てきましたが、実際には、中々大変ではないかと思っています。まだ始めたばかりなので、これから試行錯誤でやっていくこととなりますが、いずれにしても、私は「生き方の探究学習」は、学校での学びが、社会とどうつながっているのかということ、しっかりと学ぶ機会であり、究極的には、生きていくとはどういうことなのかということ、自ら知ることが求められていると思っています。

このような点で、岐阜大学教育学部附属小中学校の発表を聞くと、自らのよさや目標を定め、その上で、しっかりと到達目標を決めて取り組もうとしています。その到達目標自体に「貢献する人間性」とあるところに感銘を受けました。

やはり、人間は、生まれて生きていく。何のために生きていくのかということ、少しでも社会に貢献できる人間として生きていくということが、生まれてきている以上は求められているということで、その辺りの組み立てなどに感銘を受けました。

岐阜大学教育学部附属小中学校におかれては、あと残り3年ありますので、さらに磨いて、是非よりよいものにしていただきたいと思います。どうもありがとうございました。

○佐藤事務局長

ありがとうございました。それでは、武藤委員、いかがでしょうか。

○武藤委員

本日は、大変優れた実践の発表をお聞きして、勉強になりました。ありがとうございました。

岐阜大学教育学部附属小中学校の「どう生きる科」は、以前から噂では聞いておりましたが、詳しい内容を伺うのは今日が初めてでしたので、非常に楽しみにして聞いていました。色々な面で感銘を受けたのですが、この実践の何がすごいかというと、ジレンマやエラーの話が出ましたが、そこから逃げていないところであり、ここが「どう生きる科」の

一番肝であると思いました。

ともすれば、生命の尊厳などの話は、形式的な命は大事にしましょう、いじめはいけな
いからやめましょうというお題目だけに終わってしまいかねません。きれいごとだけで終
わってしまう危険性をはらんでいると思います。

しかし、実際は、自分の考えと人の考えは違うというジレンマやエラーがあります。こ
う思っていたけれど、実際やってみたらうまくいかないという、そういう現実があります。
そこにも、しっかりと目を向けて、それをクリアするために、どうするのかというところ
がしっかりとカリキュラムの中に仕組んであります。

そのため、実際に、子ども達が色々なことをする際に、きれいごとだけで、楽しいこと
だけでは人生はやっていけない、辛いこと、苦しいことも乗り越えて、自分だけではなく、
周りとの協力して乗り越えることを、実際のカリキュラムで仕組んで行っています。それを
やるからこそ、実際、社会に出た際に、そこから逃げずに同じようなことができます。き
れいごとで終わらせないところが、岐阜大学教育学部附属小中学校の実践の素晴らしいと
ころだと思いました。

そのため、岐阜市で、今後、「生き方の探究学習」を行う場合は、ジレンマやエラーか
ら逃げない、そういうところにこそ、しっかりと光を当て、子ども達には自分で悩む、友
達と悩む、それを周りの人の助けも借りて乗り越えるという仕組みを、この学習の中でつ
くっていくということが、子ども達の「生命の尊厳・生き方の探究学習」を定着させる上
では非常に大事だと教えていただいた気がします。

ただし、このカリキュラムを仕組むためには、先程の発表にも外部人材を活用するとい
う話があり、伊藤委員もおっしゃいましたが、人材を確保することは非常に課題になると
思います。各学校だけでは、中々できないことですので、教育委員会が組織的に外部人材
等を確保して、各学校に提示する体制をつくることは、必要不可欠だと思いました。

せっかく「生き方の探究学習」という大きな枠組みを掲げましたので、これを単発、あ
るいは題目だけで終わらせないために、各学校での実践の中で、しっかりと負の面、影の
部分にも目が行っているのかを確認しながら進めていくと、より実が上がると思いました。

これから、教育委員会の議論の中でも、具体的に色々問題点が出てくると思いますので、
我々もその都度、問題に向き合って考えていきたいと思いました。

○佐藤事務局長

ありがとうございました。それでは、足立委員、いかがでしょうか。

○足立委員

本日は、古賀校長先生、河村校長先生、どうもありがとうございました。

岐阜大学教育学部附属小中学校では、「どう生きる科」において、外部人材との連携を図っておられ、柳津小学校では、「生き方の探究学習」において、助産師等も応援しているということで、医学的な要素からは、学科としては理科や保健体育で学ばれているものだと思います。生き方、生命の尊厳については、3億個の精子の中の1つだけが卵子の中に入っていった受精し、そして、生命が誕生していくという感動的なビデオもございます。まずは、そのことをしっかりと子ども達に紹介していただき、貴方が生まれたことは、本当に奇跡であり、こうやって誕生したのだということから始めていただけると、良いかと思えます。

なお、このことには、医師も大いに協力すべきであり、現状では、医師は中学校の性教育を応援させていただいております。ただし、この取組みの観点が、生命の大切さを学ぶというよりは、望まない妊娠を避けるように、性病にかからないようにというような教育になっている部分があり、医師の裁量に任せられている部分もあるようですが、非常に難しいことだと思えます。

生命の尊厳については、具体的にこういう教材を使って実施するということまで進んでいくと、今後、何人かの医師で協力しながらやっていけると思えますので、ぜひ応援していきたいです。

○佐藤事務局長

ありがとうございました。それでは、川島委員、お願いいたします。

○川島委員

川島です。よろしく申し上げます。教育大綱の推進状況ということで、2校の取組事例についてご報告いただき、大変参考になりました。

また、かなり充実したカリキュラムが各学校で展開されていることに、非常に手応えを感じているところです。

1点目として、ここで原点に立ち返りたいと思います。教育大綱の中で「生命の尊厳へ

の理解」が据えられた背景は、冒頭で市長からお話がありました。例えば、私学という建学の精神、ずっと変わらない学校教育のポリシーがほとんどの学校にはあります。地元ですと、例えば、聖マリア女学院がありますが、カトリックを背景にしながら、教育を通じて、聖マリアの女性像を実現するということが、教育の精神の中にしっかりと位置づけられており、これは不変のものです。

そのため、やはり、教育大綱もこのような位置づけの中で、岐阜市の公教育の中で、不偏不党の理念として定着させることが、究極の目的であります。

そして、教育大綱の理念を、学校で、どう展開し、どう子ども達に息を吹き込んだのか、我々が取組んだ内容だとしたら、カリキュラムを、しっかりと、このような形で確認し、その充実度合いを利用することはとても大切です。

しかし、理念を伝える側の教職員に対して、本当に生命が宿るような研修や取組みが行われているかということも確認をしていきたいと思えます。さらに、一定の期間をかけ、継続してこの理念が実現されているかを追っていくことが、非常に必要ではないかと思っております。

2点目に、実際、報告をお聞きしながら、非常に価値のある充実した素晴らしい内容だという印象を受けました。エラーやジレンマというお話にもありましたが、実際の現場は、もっと失敗談や改善すべき内容が無数に出てくるはずで、やはり、岐阜市で教育大綱の理念を達成するためには、失敗であったり不都合であったり、今後も改善が必要な課題であったりということをもっとオープンにして、しっかりと共有しながら、支援や改善について議論していくことが大事だと考えています。

そのため、本日、柳津小学校において、生徒からのフィードバックの作文をご紹介していただいたことは、現場の生の声として、非常に重要な情報だと思えました。

また、岐阜大学教育学部附属小中学校において、カリキュラムのご説明と併せて、実際に生徒がそこでどう反応したか、どういう意見が出たかというところまでしっかりと観察されて、それが記録され、次のカリキュラムに生かされている点は、非常に有意義であると感じました。

最後に、第2部にも関わりますが、ここまでの議論を通じて、教育大綱の理念を実現するために、どのような大人たちが必要なのかについて、今までの集会的な教育というものから、徐々に個別最適な教育というような形で、生徒一人一人とどのように向き合っていくかが非常に重要だと思えます。

このことを実現させるための教師の働き方改革であり、教育DXの導入であり、一人一人への個別最適な教育です。個別最適な教育を統合する根本的な理念として、教育の大綱というものがあり、生命の尊厳をベースに置きながら、個別最適な教育を展開していきます。非常に高い理想ではありますが、このように進めていきたいと考えています。

○佐藤事務局長

ありがとうございました。それでは、水川教育長、いかがでしょうか。

○水川教育長

岐阜市の教育大綱を踏まえた教育政策を推進していく上で、「生き方の探究学習」を核に置いて取り組んでおりますが、今年度、教育委員会として、そもそも、全ての学校が生命の尊厳について理解している必要があると、原点に戻ったことがベースとしてあります。

今回、河村校長に発表していただきましたが、柳津小学校は、30年以上、全国区で生活総合、理科の研究発表を行っており、生命にしても、地域とのリンクにしても、暮らしにしても、ベースにするカリキュラムデザインの中で動いている学校なので、非常に実践の積み上げがあります。実は、河村校長には校長会の代表として、「生命の尊厳への理解」のプロジェクトの中に入り、有識者と共に取り組んでいただけてきたところです。

発表の中に、感覚性、関係性、連続性ということがありましたが、このことがはっきりすることにより、岐阜市の子ども達が、命はなぜ大切なのか、なぜ生きるということを勉強しなければいけないのかに対して、子どもなりの答えを持てるようになっていくと強く思っています。

そのため、来年度に向けて、「生命の尊厳への理解」ということをベースにして、さらに「生き方の探究学習」を深めていきたいなと思っているところです。

また、古賀校長に発表していただきましたが、やはり、教育のグランドデザインがベースになっていると思いました。通常は、学習指導要領にこうあるから、学校教育はこう動かすということなのですが、その前に、令和に生きる岐阜市の子ども達がどんな力をつけ、どんな子どもに育てたいのかということがベースにあって、教育のデザインをし直すことが大事であると改めて思っています。

その結果が、古賀校長がお話しされた、学ぶことと生きることの距離を近づけるということや、出口のところで「貢献する人間性」を1つの柱にすること、学ぶ側のラインとし

て設計していくことだと思っています。これがぶれていないので、非常に取組みが豊かに見えるのだと思っています。岐阜市においても、取り入れるところは沢山あると思いながら聞かせていただきました。

結論を言いますと、岐阜大学教育学部附属小中学校の今年の9年生が発表することと、8年後の「どう生きる科」を積み上げていった子が発表することは大きく違うだろうと思います。

なぜなら、8年間の積み上げの学びが「どう生きる科」の積み上げがあるため、あの子が発表することと、8年後の9年生が発表することをもし比較検討したら、非常に違っているということが教育の積み上げの意味だと思いながら、その時を楽しみにしていきたいと思っております。

○佐藤事務局長

ありがとうございました。

ここで、古賀様にもぜひご意見をいただければと思いますが、いかがでしょうか。

○岐阜大学教育学部附属小中学校 古賀校長

色々な観点からのご意見をいただいて、改めて学ぶ機会をいただきました。

私が発表した部分は、当然、全てがうまくいっていることばかりではありません。子ども達にジレンマやエラーと言いましたが、教員である我々にジレンマやエラーが色々と起きており、本当にこれだけの時間をかけてやっていく意味があるのかと、教科の時間も少し削っている部分があります。

これは、いわゆるI部や応用の部分を「どう生きる科」の部分に重ねてやっていこうという面白い発想ですが、本当に、それだけの成果が出ているのかもっと検証していかないといけないと思っております。子ども達の意識の変容や、最後に水川教育長がおっしゃったように、どのような積み上げがあったかということを、子どもに軸足を置いて検証していくということが大事だということを思いました。

また、岐阜市の「生命の尊厳への理解」に近い取組みは行っていますが、もっとできることがあるという実感があり、先程、足立委員さんがおっしゃられたことを持って帰り、是非、生かしたいです。今回は、多数のことを逆に学べた機会でありました。本当に感謝申し上げます。ありがとうございました。

○佐藤事務局長

ありがとうございました。それでは、市長、お願いいたします。

○柴橋市長

柳津小学校の河村校長先生、そして、岐阜大学教育学部附属小中学校の古賀校長先生、ありがとうございます。

本日お話いただきましたカリキュラムマネジメントについては、改めて、非常に印象に残りました。柳津小学校でも、岐阜大学教育学部附属小中学校でも、それぞれ6年間、9年間をどのような段階で、どう学びを進めていくか、最終的にどう着地していくかという出口のところを見定めていることは、とても大事だと思います。

また、お時間があつたら教えていただきたいことは、教職員、学校側は、マネジメントとしてしっかりカリキュラムを組んだとしても、児童生徒一人一人がそれをどう受け止め、今、あなたはこの段階だというフィードバックが、どのようにされているのかについては、大変興味があります。

特に、最終の着地点も大事ですが、プロセスの中で、先程のジレンマやエラーがあり、教職員が思い描いたカリキュラムマネジメントどおりにいかない児童生徒に対しては、どのようなアプローチをしながら成長を促しているのかについては、きめ細やかに、個別最適な対話ができると、「どう生きる科」も、「生き方の探究学習」も、本当に生きる力につながっていくと感じています。

また、これも最近色々ところで言われるようになった学校でのアクティブラーニングや様々な探究型の学びについては、素晴らしいのですが、加えて、今回、古賀校長先生がお話しされた柱の1つには、しっかりと知識についても入っています。

やはり、生徒同士が色々ディスカッションをして、お互いに学び合うことは大事です。

しかし、ベースの知識がないままで議論をしても、あまり実りある議論にはなりません。

そのため、知識をどう子ども達が習得していくかについて、それぞれの教科で行うことかもしれませんが、「生き方の探究学習」や「どう生きる科」の中で、具体的にどのようなアプローチをされているかは、大変興味がありました。知識がしっかりと柱にあることは、私の考えている問題意識と合致するところであり、大変勉強になりました。

どうもありがとうございます。

○佐藤事務局長

ありがとうございました。古賀校長先生、いかがでしょうか。よろしくお願いします。

○岐阜大学教育学部附属小中学校 古賀校長

ありがとうございます。まさに私どもが課題意識を持っている部分について、ご助言いただいたと思っています。

先程、私が申し上げた教職員のジレンマという中に、やはり、子どもは皆一律ではないため、あるテーマで探究をしていこうとする際に、子ども達の中にはテーマに食いついてこない子がいるのです。

では、どうしようかと考えたときに、もっとグループ化し、探究テーマを細分化し、さらに学年が上がるにつれて個別化し、私の、僕の探究テーマとしていくことが大事だよと職員に話をしています。

また、本校への入学は学業選抜ではなく、抽選選抜を行っており、学力的に高い子だけが集まっているわけではないため、先程の知識や議論については、教科も含めてスタートラインをしっかりと揃えて、それぞれ考えて議論させていかないと、ついて行けず、置いてきぼりにされている子が沢山いることに、目を向けていかないといけないと話しています。

このことは、どのような議題においても全く同じことであり、改めて、1つ目の柱の「知識・技能」の必要性について教えていただきました。本校に戻り、即共有したいと思っています。貴重なご意見、ご助言、ありがとうございました。

○佐藤事務局長

ありがとうございました。それでは、招聘者の古賀様は、ここまでとなります。ありがとうございました。

これで第1部を終了いたします。ここで一旦休憩とさせていただきます。

(休 憩)

○佐藤事務局長

それでは、第2部に入ります。テーマは、今年度の年間総括でございます。

第2部の進行といたしましては、事務局から説明をさせていただき、その後、意見交換とさせていただきます。

では、事務局よりご説明申し上げます。皆様、タブレットの資料3をご覧ください。

○児山教育政策課主幹

事務局よりご説明させていただきます。よろしくお願いたします。

資料3の2ページ目をご覧ください。事務局からの説明としまして、そこに記載してございます1番から7番まで、順に説明をさせていただきます。

4ページをご覧ください。今年度は、計6回の会議を開催し、施策協議及び大綱に定める成果検証を実施してまいりました。それぞれの回につきまして、資料に沿ってご説明させていただきます。

6ページをご覧ください。第1回、第2回の会議では、「各学校の共通課題の解決」をテーマに、部活動の在り方、DXの推進による学校業務改革について、ご協議いただきました。この2回では、スポーツ庁の藤岡様、株式会社情報通信総合研究所の平井様、多治見市教育委員会の丸山様を招聘者としてお招きし、ご講話をいただきました。

7ページをご覧ください。上段に協議意見の要旨を記載してございますが、これらを受けまして、部活動の在り方に係る協議意見を踏まえた施策検討を、下段にございますように上げさせていただきます。少しご紹介させていただきます。

1つ目は「(仮称)部活動地域移行推進会議を設置」について挙げさせていただきます。2つ目に「持続可能な部活動のあり方の模索」、3つ目に「学校教育の一環として行う、部活動の検討」、4つ目は「部活動に代わる、自己実現の時間への進化」、この4点を挙げさせていただきます。

なお、見てお分かりいただきますように、数字のところでございますが、色つきのものとそうでないものがございます。色つきのものにつきましては、短期的に早く取り組んでいきたいと思っているものでございます。逆に、色が無いものにつきましては、中長期的に取り組んでいくものとして区別するため、記載させていただきます。

この後、ご説明させていただきます第2回以降のものも同様に記載してありますので、ご承知おきください。

続きまして、8ページをご覧ください。DXの推進による学校業務改革に係る協議意見

を踏まえた施策検討を、下段にございます4つ、挙げさせていただいております。

1つ目が「(仮称)スマート連絡帳アプリの導入」、2つ目が「出退勤管理システムの改善検討」、3つ目が「学校向け配付物のペーパーレス化」、4つ目が「岐阜市版GIGAスクールの実現」の4点とさせていただきます。

9ページ以降、11ページまでは、協議意見交換の詳細を記載してありますので、参考にさせていただけたらと思います。

続きまして、12ページをご覧ください。第3回の会議では、「子どもの学びの構造転換」をテーマに子どもが主体の学びと9年間一貫した学びについてご協議いただきました。この回では、京都大学総合博物館の塩瀬様を招聘者としてお招きし、講話をいただきました。

13ページをご覧ください。上段の協議意見の要旨を受け、下段にございます協議意見を踏まえた施策検討としまして5つ、記載しております。

1つ目が「草潤パッケージの各校への展開」、2つ目が「デジタルを駆使した授業モデルの構築」、3つ目が「新たなデジタル学習教材の導入検討」、4つ目に「電子書籍を活用した学びの充実」、最後に「多様な学校のかたち・可能性の検討」とさせていただきます。

14ページ以降は、同じように詳細が載せておりますので、ご参考にいただければと思います。

17ページをお願いいたします。第4回の会議では、「地域が支える、子どもの学びと育ち」をテーマにコミュニティ・スクールの深化とサードプレイスの充実についてご協議いただきました。この会議では、白川村立白川郷学園校長の大坪氏、NPO法人コミュニティサポートスクエア代表の杉浦氏のお二方を招聘者としてお招きし、ご講話をいただきました。

18ページをご覧ください。下段の協議意見を踏まえた施策検討でございます。4つ、挙げさせていただきました。1つ目が「(仮称)ふるさと岐阜市学の創設」、2つ目が「(仮称)君が夢を拓くプロジェクトの検討」、3つ目が「コミュニティ・スクールの更なる深化に向けた改革」、最後4つ目が「サードプレイスのネットワーク構築」です。

続きまして、21ページをお願いいたします。第5回の会議では、「岐阜市版GIGAスクールの更なる推進」をテーマに、岐阜市GIGAスクール推進計画(案)とデジタル・シティズンシップ教育と教育DXについてご協議いただきました。このときは、岐阜

聖徳学園大学教育学部教授の芳賀様を招聘者としてお招きし、講話をいただきました。記憶に新しいところではないかと思えます。

22ページをご覧ください。下段、協議意見を踏まえた施策検討でございますが、4つ、挙げさせていただきました。1つ目が「デジタル・シティズンシップ教育の展開」、2つ目が「未来の教室づくりを目指すデジタル環境の充実」、3つ目が「ICTを活用した子どもの健康サポート」、4つ目が「未来を見据えた、これからの学校のランドデザインを検討」です。

26ページをお願いいたします。こちらは、先程まで行っていただきました第1部の内容でございます。「大綱実現に向けた施策推進状況」をテーマに「生き方の探究学習」について熱心にご協議をいただきました。また、先程までお見えになられました岐阜大学教育学部附属小中学校校長の古賀先生からご講話をいただきました。

次に27ページですが、これは協議第Ⅱ部の前の話でございますので、予想を基に作成させていただきましたが、見ていただくところは、下段にあります協議意見を踏まえた施策検討です。全校というのは、岐阜市中の小中学校全てということですが、1つ目が「全校共通のモデルカリキュラムを検討」、2つ目が「地域と共に創る、多様な学びの機会の創出」、3つ目が「各校での取組みの充実を支援する、アドバイザー機能の検討」、最後の4つ目が「生命の尊厳への理解を深める、いじめ防止のための取組みの充実」です。

最後、28ページをご覧ください。これまでの総合教育会議での意見交換、あるいは今ご説明させていただきました施策につきまして、画面にあります2点の事項について、この後、ご協議いただきたいと思いますと考えております。よろしくをお願いいたします。

○佐藤事務局長

それでは、委員の皆様から、順にご意見を伺ってまいりたいと思います。お時間の都合上、お一人の発言時間は5分以内を目途としてご案内したいと思います。では、川島委員、いかがでしょうか。

○川島委員

では、よろしく申し上げます。28ページ、協議事項①にあります意見、提案についてです。総括すると、どう児童生徒一人一人と向き合うか、誰一人取り残さないかについて先程も発言しましたが、岐阜市の教育をより個別最適をキーワードに、これを理想に掲げ

て変革をしていくことが、いじめの問題や「生き方の探究学習」をどう展開するかなど、今直面している多くの課題の1つの切り口になると捉えています。

そのため、今後の施策を考えるにあたり、いかに個人に効果のある施策になっているかについて、共に見ていきたいと思っています。

当然、私のベースには、学校とは、小学校6年間と中学校3年間、あるいは義務教育学校の9年間で、この個別最適化のパッケージや教育カリキュラムを掲げ、子ども達が集団生活の中で切磋琢磨し、人間の成長が図られていく場であると考えています。

いずれにしても、学校での集団生活の中で、適応できる子、適応できない子、それぞれの課題やジレンマがあるというお話がありましたが、そういった中で人間が磨かれ、成長していく場であるということには変わりありません。

しかし、今までよりもさらに個別最適な教育改革をどう実現していくかが重要ではないかと思います。

そのため、教員の業務の主軸を、生徒一人一人と向き合う時間に割り振り、シフトしていくための教員の働き方改革であるということ、そして、これを実現するためのツールとして教育DX、IT機器を最大限活用しながら、一人一人に向き合う教育をどう実現していくかということが、協議の中でしっかりと議論され、先程お話をさせていただいた意見に行き着きました。

また、幾つかの施策をお示しいただきましたが、率直に申し上げますと、メニューが極めて多いです。

つまり、教員業務の主軸を、児童生徒一人一人に振り向けていく中で、施策メニューをさらに増やすことが、本当に良いことかということです。場合によっては、施策を展開しながら取捨選択、絞り込みをかけていくことも今後の検討課題にしていけないといけないと思っています。

多くの意見を出し、多くの施策を展開しながらでも、その取捨選択を積極的に行っていないと、施策を推し進める中で外れた方向に船が出てしまうことがあるかもしれません。

やはり、目的は、教育大綱に定められたポリシーを実現し、個別最適な教育を提供する学校環境を構築することですので、それに必要な施策を次々と立案をしながら、さらにシェイプアップしていくことが非常に重要だと思います。

そのため、②次年度協議すべき事項としましては、必要な施策メニューを増やすことと併せて、施策を減らすことについても目を配っていききたいと思っています。

○佐藤事務局長

ありがとうございました。それでは、足立委員、いかがでしょうか。

○足立委員

ありがとうございました。まず、今年度の招聘者の方々は本当に素晴らしく、またタイムリーな方ばかりだったと思いますので、その人選にまずは感謝申し上げます。本当に課題に合ったお話を聞くことができ、しかも、課題について実践されているお話も聞くことができ、本当に勉強になりました。

また、オンラインの活用もよくできていたと思います。今年度の成果であると思いますが、コロナ禍ということもありまして、その副産物のような形でDXやGIGAスクールについては非常に進んだということがあります。

それから、草潤中学校の評価が非常に高まり、取組み内容が他校にも応用されようとしていること、この2つが非常に喜ばしいことだと思っております。

なお、次年度、協議すべきこととして、部活動では、特に地域の活力を導入する取組み、課題だと思えます。

それから、サードプレイスとしての放課後児童クラブについては、内容を充実させていただきたいと思っております。

また、注目しておりますのが、先日発表されましたICTを活用した健康サポートについてであり、積極的に取り組んでいただきたいと思っております。

そして、探究的な学びの実践について、教師がコーチとなり、子どもが主体となることは、言うは易く行うは難しであります。今日のお話を聞いていて、着実に進められているため、今後もさらに推し進めていくようお願いしたいと思います。

ただし、次年度、DXが推進されたからといって、パソコンばかり見ている、患者の顔を見ない医者のようにならないよう、是非ICTについてはツールとしてお使いいただき、教職員は、生の子どもさんの顔と向き合っていただきたいと思えます。

それから、先程も申し上げましたが、児童生徒の誰もが生命の尊厳を理解するために、医師として協力していきたいと思っております。

○佐藤事務局長

ありがとうございました。それでは、武藤委員、いかがでしょうか。

○武藤委員

武藤です。全6回を振り返り、非常に充実した協議ができたということが率直な印象です。

それでは、施策として挙げていただいた中で、特に注意をしている2つについて、お話をさせていただきます。

1つ目は、コミュニティ・スクールについてです。卒業生や若い世代の参画を促進と書いていただいておりますが、これは私が前々から力説していたことであり、具体的な施策についての検討が入っていることは、ありがたいと思っています。

恐らく、卒業生といっても高校生までが肝かと思います。高校生はまだ地元にいる人が多いでしょうし、中学校を卒業して間がなく、小中学校に関わりやすい面もありますので、高校に入っても、地元密着で小中学校に関われる機会をどうつくっていくかが、非常に大事な視点か思っております。

2つ目は、先回話題に出たデジタル・シティズンシップについてです。生命の尊厳で自由の相互承認という教育大綱の中にも出てくるワードを実現するためには、他者と色々と議論を行い、合意形成していくことが必要不可欠になると思います。

しかし、今後は、それをデジタルでやっていくということが不可欠になっていくと思います。デジタルというツールを使って色々な人とつながって議論して合意形成していくことが標準になっていくと、デジタルに対する向き合い方を、子ども達にしっかりと身につけさせることは、まさに、民主主義そのものを今後充実、安定させていくために必要不可欠な要素だと、強く思いました。

これまでも、色々な実践をされていますが、デジタル・シティズンシップという1つ核となる考え方を、今回は全体の施策の中にしっかり串として通し、単なるデジタルの使い方というレベルではなく、自分たちで自分たちの社会をつくっていくために必要な要素だということで、子ども達が身につけてもらえるような、充実した教育を展開されることが望ましいと思っています。

なお、次年度、協議すべき事項については、施策の中に仮称が幾つかありますが、これらについて実際どのように進め、また、実際に実践してみて、どのような問題があったのか議論をしていくことが課題になると思っています。

特に、私が一番気になることは、部活動についてです。なぜなら、地域移行について文科省が具体的な期限を示しており、進めないといけないことになっているため、具体的な話を避けて通れないと思っています。私が地域で活動している中でも、最近では部活動の地域移行について具体的に話題に出るようになってきていますので、それぞれの地域でこれから部活動やその入り口となるスポーツ少年団、地域のスポーツなどをどうしていくかについて考えようという意識は大分高まっていると思います。

そのため、そういった動きが促進し、それぞれの地域の悩みに対し、教育委員会がどうサポートしていくのかといった辺りを重点的に議論する回が必要になってくると思っています。

次年度以降も充実した協議が続けられるよう、我々も一生懸命教育委員会の中で考えていきたいです。

○佐藤事務局長

ありがとうございました。それでは、横山委員、いかがでしょうか。

○横山委員

まず、今年度の協議成果に対する意見ですが、教育大綱の基本方針に沿って、教育振興基本計画に出てくる様々な目標をテーマにした協議が毎回行われ、一定の方向性というものが見えて施策化されてきていることについて、私は岐阜市の総合教育会議は、全国的に見ても非常に機能している総合教育会議ではないかと思っています。今後もこういう形で進めていけるといいと思っています。

今年度、色々な方向性に基づいて施策が打ち出されていますが、いずれにしても、多くの項目が全て完成したわけではなく、途中であるため、さらに着実に進めていくことが大事だと思っています。その中でも生命の尊厳や、教員の働き方改革については、力を入れて議論をしていくべきだと思っています。

それから、2番目の次年度協議すべきと考える事項については、教育DXを柱にした教育づくりを行うべきだと思っています。DXという言葉は、まだ使い方がまちまちのような気がしますが、要は、構造を変えるということなので、教育DX、学校DXは、学校の在り方そのものを変えることとなります。そのため、教員の意識の改革が求められますので、ぜひ教育DXを施策の柱として、次年度取り組んでいけたら良いと思っています。

なお、この教育DXを行うとしても、基本的なことはICTの活用の方法です。教える教員も子ども達もしっかりとICTの活用が出来て初めて教育DXが動き出します。ここで提案したいことは、幼児教育について、もう少し深掘りした、さらに進化した取組みを次年度出来ないかと思っています。

これまで色々な研究成果の周知やセミナーを通した啓発活動が、この数年間中心になっていたと思います。一定の成果があったと思いますが、さらに、もう一步進めるという意味で、岐阜市には幼稚園、大学もありますので、幼小中高大も取り込んだ施策を進めていくことは大事であると考えています。

話が少し飛びますが、まずは、幼児教育の充実ということで、DX絡みで言えば、幼いうちから遊びを通してICTに携わることをさせていけば、小学校へスムーズにつながっていくのではないかという気がしています。

今挙げましたことは一例ですが、次年度は、教育DXを柱にした教育施策をさらに充実させることと併せて、子どもファーストという意味合いもありますので、幼児教育にも力を入れた取組みを行っていくと良いと思っております。

○佐藤事務局長

ありがとうございました。それでは、伊藤委員、いかがでしょうか。

○伊藤委員

私も、今年度も総合教育会議で充実した議論を積み重ねていくことができたことを大変ありがたく思っております。

ただし、実際の現場の変化と、この議論がリンクしていなければならず、会議ばかりが白熱していても、現場の先生方の認識が変わっていかなくては何も変わらないことが根本にあるため、現場の先生方のご意見に、もっと耳を傾けていかなければいけないと思っております。

その上で、やはり、現場の進捗状況が見える化をしていかなければいけないと常々思っています。これは企業でいうPDCA、行政でもそのような仕事の仕方になっているかと思えます。教育現場では、このPDCAで動くことが中々できていない現状があるかと思えますので、具体的な指標をもって、見える化し、KPIなども使って、我々がもっとチェック機能を果たすべきではないかと感じております。

これは総合教育会議ではなくて、通常の定例会が基本になるかもしれませんが、この辺りを今後より深めていきたいと思っております。

そのため、第1回、第2回の総合教育会議で議論した教職員の働き方改革、ICTを活用した学校業務のDXが、どの程度進んでいるかについて、次年度は注視していきたいと思っております。これは、全ての変革の基本であり、先生方の心の余裕なくしては何も学校現場は進んでいかないと感じておりますので、ここに特に気をつけて見ていきたいと思っております。

そして、具体的な施策について、特に力を入れていきたいと思っておりますのが、仮称とありますが、ふるさと岐阜市学の創設と、君が夢を拓くプロジェクトの検討についてです。この2つは、以前からお話をさせていただいていますが、つながっていると思うのです。岐阜市で生まれ育ったというアイデンティティーをもって地元で活躍している人たちや、逆に、このアイデンティティーを持って世界に羽ばたいて活躍している人たちの子ども達の学びにつなげていく。今日の話にもありましたが、この2つを是非来年度から進めていきたいと思っております。

なぜなら、学校が良かれと思って選んだ地元の方たちと子ども達が聞きたい話がミスマッチしていることがよくあります。子どもに今日の話はどうだったかと聞くと、おじいさんの自慢話ばかりだったということがあり、子ども達が今聞きたいことは、もちろん地元のこともありますが、普段は聞けない世界で活躍している方たちの話なども十分魅力的だと思います。

そして、世界で活躍している人たちが、SNS上ではキラキラとしたことばかりを発信しているように見えるかもしれませんが、現実には、光と影を持って頑張ってきたというようなお話も、是非、公教育で学べる機会があると良いと思っております。

そして、もう一つ、草潤パッケージの各校への展開については、今年度、やはり全国的に見ても不登校児童生徒の数は増えておりますので、草潤中学校が岐阜市で開校して1年となりますが、ここで成功した事例を各校でも取り組んでいくよう進めていきたいと思っております。つい昨日の新聞で、名古屋市が校内にフリースクールをつくるという話が掲載されていましたが、やはり、こうした事例や、学校に行けなくてもオンラインでは参加している子ども達を認めていけるような体制をつくっていくことも必要と思っております。

以上のこの3つの施策について、個人的にも力を入れていきたいと思っておりますので、よろしく願いいたします。

○佐藤事務局長

ありがとうございました。それでは、水川教育長、いかがでしょうか。

○水川教育長

全6回の総合教育会議で、沢山の気づきや学びをさせていただいたと思っております。

その中で、生命の尊厳について、誰一人取り残さない教育をやっているという成果を、どこで見るかについては、自分にはよいところがあると誰もが思っているかどうか、将来に対する夢や目標を、子どもが持っているかどうかということが1つの大事な指標になると思っております。

その意味で、アップデートしていかないといけないことが2つと、来年度に向けてさらにOSそのものをもう少し見直さないといけないことが2つほどあることに気づきました。

1つ目にアップデートしていかないといけないことは、学びの主体を真に子どもものものにして、子ども達の学び方を個別最適な学びへと変革していくことです。

学力については、全国学力学習状況調査で担保したのですが、子どもの中の充実感がいまひとつであり、草潤中学校での新しい学びの成果が見えてきたことと、デジタルを活用したハイブリッド授業が出てきたことを考えると、もっと個別最適な学びへと変革するように、アップデートしていかないといけないと心を新たにしています。

それから、2つ目にアップデートしていかないといけないことは、指導体制をもっとチーム支援という考え方にシフトしていかなければいけないことです。

小学校も、教科担任制を取り入れてより多くの先生が指導にあたることや、部活動の地域移行ということもありますが、いじめ対策や不登校対策についても、一部で支援していくことから、チーム支援という形でアップデートしていかないといけないと思っております。

そして、OSの見直しの1つ目は、9年間かけて、学ぶことを生きることへとつないでいく教育が必要で、18歳までに、どのように子どもの生きる力を育てていくのかということを見据え、岐阜市としては、コミュニティ・スクールを生かした探究学習やふるさと岐阜市学などを、新たに開発していかなければいけないと強く思っております。

それから、OSの見直しの2つ目は、これも各委員さんがおっしゃられましたが、DXの推進は、教育そのものの構造改革であり、先生方の教育に対する意識改革、働き方改革についてDXを通してやっていくことになると思いますので、DXが、合理的で質の高い

教育を担保していくことを、証明していかなければいけない責任があると思いました。

○佐藤事務局長

ありがとうございました。それでは、市長、お願いいたします。

○柴橋市長

全6回の総合教育会議でご協議いただきまして、どうもありがとうございます。

テーマが非常に多岐にわたりましたが、欲を言えば全部の施策を実施したいですし、実施しなければならないという気持ちを持っております。

それでは、少しポイントを絞ってお話したいと思います。

1つ目は、伊藤委員がおっしゃられましたように、学校のDX等の問題は、つまるところ、いじめの重大事態から見た先生方の働き方改革、学校業務改革であり、子ども達と真に向き合う時間を確保していこうというところから議論がスタートしております。そのため、その点については、今年度も議論いたしましたし、次年度もその点をいかに実践していくかということは、重要なテーマだと受け止めております。

もう一つが、個別最適な学びについて、総合教育会議でもデータサイエンスをしっかりと生かして学んでいこうということで、本日もカリキュラムマネジメントと、児童生徒一人一人へのフィードバックについてお話がありましたが、よりその必要性の大きさを感じています。

そのため、子どもの健康サポートは、学習というよりも心の中の状態ですが、一人一人を継続的に、しっかりと定点観測できることは、データサイエンスを生かすといった考えを支える重要な施策だと思っております。

2つ目は、本日も議論となりましたが、「生き方の探究学習」については、いじめ重大事態の中で、「生命の尊厳への理解」からつながってきた大変重要なテーマです。これを次年度も学校現場で実践していただくこととなりますが、これが、常に本当の意味で、子ども達が生き方を探究することにつながっているのかを、しっかりフォローアップしていく必要があると思っております。

3つ目は、異年齢の学びについては、DXと違う視点ですが、子ども達が安心して学べる環境や子ども達の自己肯定感に対して、非常に良い影響を与えていることも、今回の会議でよく理解できました。

そのため、異年齢の学びについては、実際に非常に効果的だとするならば、どのように具現化していくのかについても、大事なテーマになるかと思えます。

最後に、不登校の問題については、足立先生がおっしゃってくださいましたように、草潤中学校が多くの方の評価をいただき、実際に、子ども達の安心した学びの環境が保障されたことは、関係者の皆様、学校現場の皆様に、本当に感謝を申し上げたいと思えます。

その上で、草潤中学校の開校の準備段階から、いかに草潤中学校での知見やノウハウを次へ展開するかということが大変重要であり、そのことをどう具現化していくかについては、次年度の大事なテーマだと思えますので、皆様とまたしっかり協議をしてみたいです。

なお、未来の教室というと、どうしてもDXばかりに光が当たりますが、今年1年間で議論してきたことは、近い未来の子ども達が学んでいる学校での新しい姿であろうと思えます。

是非、ここでの議論が、現場で具現化し、また、トライ・アンド・エラーもあるかと思えますが、エラーの部分をしっかり捉えながら、皆様と改善に向けた協議をしていきたいと思えますので、またご協力をよろしくお願ひしたいと思えます。

○佐藤事務局長

ありがとうございました。それでは、これもちまして、会議を終了したいと思います。今年度の総合教育会議の最後となりますので、市長から、改めて、一言いただきたいと思えます。

○柴橋市長

では、改めまして、今年度の6回にわたる総合教育会議にご理解、ご協力をいただき、本当にありがとうございます。

先程は、横山委員から、岐阜市の総合教育会議は非常に機能しているという大変ありがたいご意見をいただきました。教育の現場にいらっしゃいますのは、教育委員会の皆様をはじめ学校現場の皆様です。私は、ここで皆様と具体の議論をしっかりと行い、心を合わせて方向性を示しながら、設置者として、また、予算を議会に提案する側として、実際に各事業が議会でも認められて子ども達に届いていくようにしていく、そのことが、この総合教育会議の真の意味だと思えます。

そのため、また次年度も、よろしければ年に1回や2回ではなくて、色々なテーマについて具体の議論を重ねさせていただき、生きた議論をさせていただければ、大変ありがたいと思います。

最後に、本日は古賀校長先生に「どう生きる科」についてお話しいただきましたが、私も含めた皆様方の成長過程の中で、義務教育の小学校1年生のときから、生きるということについて考え、成長していくことは、中々なかったのではないかと思います。

以前から、道徳という時間がありましたが、どうしても、道徳の教科書にある、ありがたいお話を聞き、ある程度、型にはまった意見を言って終わりというが多かったと思います。

しかし、教科書の中の、どこかの、誰かの話ではなく、自分や仲間が生きていく中には、色々なスキルも、知識も、人とコミュニケーション能力も必要であり、複雑多様化している社会の中で、今の子ども達は、昔よりも、はるかに色々な壁を乗り越えながら生きていかなければいけません。

その際に、9年間の義務教育の中で、どう生きるかについて、子ども達がしっかりと考え、自分なりの生き方を見いだしていく教育課程であってほしいと、心から思っております。

そして、水川先生がおっしゃっていただいたように、岐阜市の「生き方の探究学習」が、年々進化し、発展し、岐阜市で育った子ども達が、9年後どうなるかと考えると、「生き方の探究学習」は、10年、20年、30年経て、子ども達がどのような大人になり、社会に貢献し、世の中を支えてくれているかを期待する取組みであると思います。

また、現場の先生方には、色々なご負担もあるかとは思いますが、「生き方の探究学習」は、私たちがいじめ重大事態以来、見いだしてきた、一番重要なポイントであり、これが大事だと見定めて提案をしてきたものであります。

そのため、是非、学校現場の中で、生命の尊厳ということを正しく捉えながら、子ども達に対し、先生方の全人格をかけて、伝えていっていただきたいと思います。来年度もよろしく願いいたします。

それでは、皆様、本当に1年間、ありがとうございました。大変お世話になりました。

○佐藤事務局長

ありがとうございました。

本日の会議録につきましては、後日、市ホームページでの公開を予定しておりますので、よろしく申し上げます。

以上をもちまして、今年度の総合教育会議は全て終了となります。皆様、ご協議いただきまして、ありがとうございました。

(16時00分閉会)